

# ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO.4

2月14日

触れてはならない真実

—謝罪する関係者が隠し通す事実



辞意を表明したノヴァク・カタリン大統領 (Instagram)

2024年2月3日

ノヴァク大統領の辞任はメディアから問題（児童性的虐待者の恩赦）が提起されてわずか1週間の短期間で幕が閉じられた。オルバン首相が決定を急いだ背景に何があったのか。大統領辞任の翌日にヴァルガ・ユーディット（元法務大臣、2024年欧州議会選挙 Fidesz 筆頭候補）も国会議員辞職を表明し、政治生活から身を引くことを表明した。グヤーシュ官房長官、スイイヤールトー対外経済外務大臣と並んで、ポスト・オルバンの有力候補者だと見なされていた女性政治家2人が Fidesz 政権から離脱した。首相と大統領のコミュニケーションを担ってきたバログ・ゾルタン（元人材省大臣、プロテスタント教会司教）も、恩赦に賛成したことを謝罪するだけで、どういう経緯でこの恩赦案件が大統領府に寄せられたのかについては口をつぐんでいる。

謝罪する関係者は皆、「恩赦を提案していない」と言いながら、自らの不明・不手際を謝罪するだけで、「誰が恩赦を申請」し、誰が「恩赦を強くバックアップした」のかについては語らない。この1点について、関係者は皆、口をつぐんでいる。すべての関係者は肝心の事実を隠そうとしているのではないだろうか、そしてその事実とは何だろうか。



ヴァルガ・ユーディット（元法相）

ノヴァク大統領をめぐる野党からの批判に、オルバン首相は素早く反応し、降りかかる火の粉を必死で払おうとする姿勢が見える。大統領が署名した恩赦申請に、オルバン首相周辺がかかわっていたという批判を恐れ、問題が政治問題化しないうちに、大統領を切り捨てる決断をしたのではないだろうか。すべては自らの権力を

守るためである。これまでのオルバン・ヴィクトルの行動はすべて、権力維持の観点から行われているから、異常に素早い行動の背景が注目される。

当時の法相だったヴァルガ・ユーディットは、今のところ、「自分が恩赦を提案した事実はない」というだけで、それ以上の言明を避けている。他方、ヴァルガの前夫であるマジャール・ピーテルは、前妻の辞任を受けて、Fidesz 政権が影響力を保持する公的機関や半国営企業で保持していたポストから辞任することを表明した。その理由は、「もう腐敗した政権の片棒を担ぎたくない」からだと説明している。マジャールはグヤーシュ政府官房長官と学生時代からの友人であり、グヤーシュとともに Fidesz に入党した経緯があり、マジャール＝ヴァルガ夫妻（2023 年に正式離婚）はともに Fidesz 支配体制の中枢を担ってきた人物である。そのマジャールが反政府系のメディアの長時間インタビューに応え、Fidesz 政権の内情を暴露している。ただ、恩赦の案件については具体的な事実の説明はない。ユーディットから実際の恩赦提案者の名前を聞いていないのか、あるいはこの案件は数多くある Fidesz の問題の一つにすぎないから、恩赦を提案した人物を詮索する意味はないと考えているか。

確かに、恩赦を提案した人物を知ることにはそれほどの意味はないかもしれないが、もしそれがオルバン首相周辺から提案されたとすれば、オルバン首相の慌てぶりが理解できる。それが暴露されれば、自らの権力維持を揺るがす事態になるからである。だからこそ、この事実を探ることに意味があると考えられる。

## 問題の発端

事は 2023 年 4 月まで遡る。ローマ法王来洪に際し、ノヴァク大統領は 4 月 27 日付で恩赦実行に署名した。恩赦申請は 446 件あり、そのうちの 40 件が承認された。この時、具体的な人名は公表されなかったが、過去 19 年間の恩赦が 40 件にすぎないことを考えると、異例な数の恩赦だと報じられた。

当該の児童性的虐待事件の被告の人名は公表されなかったが、当該被告が第一審、第二審の判決を不服として最高裁に上告していたために、2023 年の 9 月の最高裁判決において恩赦の事実が書面に記されることになった。その裁判記録が 2024 年 1 月末に最高裁判決集として公刊され、恩赦の記載を偶然に見た弁護士が反政府系のメディアにその事実を伝えたことから、当該被告が恩赦を受けた事実が公になっ

た。そして、この報道から1週間も経たないうちに、大統領辞任が辞任するという不可解な動きになった。

当該被告（ビチケ児童養護施設副所長）がかかわった事件とは、ブダペストから遠くない町ビチケにある児童養護施設で起きた少年にたいする性的虐待で、2004年から2016年にかけて当該施設所長が10名以上の少年にたいして行った性的犯罪である。すでに所長には実刑が下され収監されているが、副所長は事件を知らず、共謀行動を取ったことが共犯行為として認定された。2016年に性的虐待を受けた少年2名が、テレビチャンネルRTLの番組で告発したことから、所長と副所長が逮捕起訴された事件である。

この児童施設の所長と恩赦を受けた副所長はビチケでの名士で、とくに副所長はスポーツ活動などの組織で良く知られた人物だった。Fideszの政治サークルのなかで活発に活動していた人物としても知られている。副所長は自らの潔白を訴え、恩赦を受けた後も、残された法的規制を全廃させるために控訴していた。

ビチケ町はオルバン首相の出身地であるアルチュートドボズ町の隣町で、オルバン・ジュズーJr.（オルバン首相の実弟）は現在もこの地域を拠点に事業を展開している。高校時代にレスリング選手だったが、卒業と同時に選手生活を終えた。その後、この地域のスポーツ活動に力を入れ、2009年にNIKÉスポーツクラブを立ち上げ、その名誉会長に就任した。恩赦を受けた副所長はオルバンJr.のレスリング仲間であり、児童養護施設のレスリングコーチとしてこの施設で働き始め、やがて施設の副所長になった。オルバンJr.とビチケ児童施設とはレスリングを通してつながりがあり\*、服役している所長とも、恩赦を受けた副所長とも知人関係にあった。

\*2002年9月の地方選挙時に、オルバン・ヴィクトル（この年の総選挙で下野）はビチケ町を訪問し、Fidesz系組織の集会に参加した。この時の選挙名簿の筆頭候補が、児童虐待で逮捕された所長だった（<https://gulyasagyumedia.hu/2024/02/14/orban-viktor-2022-bicskei-pedofil-kampany-onkormanyzati-valasztas-osszefogas-bicskeert-egyesulet/>）。首相になってからも、機会を見て出身地の隣町であるビチケを訪問している。

好意的に考えれば、実際に性的虐待を行った所長に比べ、副所長は性的虐待に加わった事実はなく、所長の行為を知らず、その隠ぺいに加担した罪で有罪判決を受けた。バログ顧問の説明によれば、「罪の内容を考慮すれば、当該副所長は恩赦に受ける資格がある」と考えたという。ただ、オルバン政権のこれまでの政策から外れたことは間違いなく、バログ顧問は自らの不明を恥じ謝罪した。

しかし、問題は犯罪の軽重を超えて、誰が恩赦の申請を行い、その実現を政治的に達成しようとしたかである。もし政権中枢周辺がこの恩赦申請に加担していたとすれば、それ自体が大きなスキャンダルになる。しかも、そればオルバン首相周辺から提案されたものであれば、政権を揺るがず問題に発展する。



オルバン・ジュズウーJr. (オルバン首相実弟)

施設で保護されている少年への性的虐待が明らかになった後、正犯である所長の弁護を担ったのは、オルバン家が所有する会社の顧問弁護士である。また、収入の道を断たれた副所長の弁護にはハンガリーで著名な弁護士が付いたが、副所長に弁護費用を払える収入はないことを考えると、オルバン家所有の会社が何らかの形で費用を担っていると考えられる。

このように見ると、当該被告の恩赦申請にはオルバン Jr.がかかわっていると見るのが自然である。もしそうだとすれば、オルバン首相が問題の早期収束を図った意図を理解できる。オルバン首相が、「憲法を改訂し、大統領といえども小児性愛者に恩赦を与えない改正を実施する」と唐突に表明したのは、自らの家族がこの事件にかかわっていたことから世論の目を逸らす意図があったと考えられる。劣勢を逆手にとって、先手を打って優位に立つのは、オルバン首相の常套手段である。自らの責任を振り払い、すべてを大統領に負わせることで事態の収束を図ったと考えられる。もちろん、その代価として、ノヴァク大統領には歴代大統領が享受してきた

特権（終身報酬月額 460 万 Ft、退任後の住居、運転手付き車、秘書等の便宜供与）を与えて口封じすることも忘れていない。460 万 Ft は現在の為替レートで 200 万円である。それらをすべて捨ててまで、ノヴァク女史が真実を公表する気概や勇気はないだろう。もっとも、これら費用はオルバン一家が賄うのではなく、すべて公金から支出されるのだから、オルバン首相に義理立てする筋合いのものではないが。ハンガリーは体制転換前も現在も、社会的エリート（政治家、学者、スポーツ選手など）に法外な手当（年金）を支給している。

他方、オルバン政権で人材省（教育省）大臣を務め、その後、ノヴァク大統領の顧問となったバログ・ゾルタン（プロテスタント教会司教）が、ノヴァク大統領とオルバン首相とのコミュニケーションを仲介していた。ここから一時、バログ顧問が大統領に恩赦を提案したのではないかという憶測が流れたが、バログ自身は恩赦申請を行っていないと述べている。他方、推測ではあるが、オルバン実弟が恩赦申請を後押しし、恩赦の要望をオルバン首相に伝え、それが口頭でバログ顧問に伝えた可能性を否定できない。

ハンガリーではまだこのシナリオは報道されていないが、もしオルバン首相実弟がかかわっていることが明らかになれば、オルバン首相自身の進退が問われる問題である。だから、先手を打って、法的決済（恩赦署名）を行った人物に形式的な責任を取らせ、幕引きを急ぐ必要があった。

### ヴァルガ元法相の前夫マジヤール・ピーテルが暴露した事実

ところが、意外なところで造反の動きが出た。辞任を表明したヴァルガ・ユーディットの前夫マジヤール・ピーテルは、反政府系メディアの長時間インタビューに応え、90分にわたって夫妻が経験した Fidesz 政権内部の異常な権力行使の実態を明らかにした（<https://www.youtube.com/watch?v=8cJulnczg2E>）。



## 反政府系メディア Partizan に出演したマジャール・ピーテル

ここでは、彼が述べた注目すべき事実を列挙する。

1. このインタビューに応えたのは、ノヴァク大統領にたいする異常な攻撃を集中させた政府系メディアにたいして、堪忍袋の緒が切れたからだと述べている。大統領への攻撃を指示したのは、オルバン首相の右腕で、コミュニケーション（プロパガンダ、イデオロギー）全般を取り仕切り、公安警察の頂点に立つロガン・アンタル（官房長官）であり、ノヴァク大統領への攻撃はロガンが指揮している（もちろん、オルバン首相の承認を得た行動である—筆者注）。
2. 2021年に別居した時に、首相官邸に呼ばれた。そこで公安警察の人間から、別居の理由を聞かれ、状況を説明するように「威嚇」された。それに答えなかったところ、その後、勤務先である「学生融資センター」（政府機関、所長を務めていた）に公安警察が突然乗り込み、コンピュータ等の「証拠」物件を持ち去った。これを指揮したのは、ロガンである。

ヴァルガ・ユーディットとの別居・離婚を契機に、政権に不都合な事実が暴露されることを恐れてのことである。



FIDESZ のイデオロギーや経済的利得を発案し、オルバン首相の片腕として  
FIDESZ 政権内部の動きをも監視する役割を担うロガン

3. 2021年に、ヴァルガ・ユーディットが政府の家族補助金 1000 万 Ft の補助を受けて、バラトン湖畔に別荘を購入したのは補助金規定に反するというニュース

がメディアに流れたが、この情報を流したのはログーンである。別荘としてではなく、居住住居を購入したのだが、ログーンはユーディットを攻撃する目的で、意図的にこの情報をメディアに流した。

4. これに先立つ 2019 年暮れに、ログーンは二人目の妻と離婚した折、離婚した妻のために、バラトン湖畔の建築が許可されない地区に 1ha の広さの豪邸を買い与え、それがメディアに叩かれた経緯がある。それと比べれば、わずかな金額に過ぎない補助金をメディアに漏洩したのは、自らのスキャンダルを打ち消す意味があった。
5. 政府の重要決定は、すべてオルバン首相、ログーン閣僚官房長官、グヤーシュ政府官房長官、オルバン・バラージュ政治戦略担当首相顧問の 4 名で決めており、ログーンはプロパガンダの責任者であるだけでなく、治安・諜報警察を取り仕切る責任者でもある。

政府内部で法務省をめぐる疑惑が次々と暴露され、当時の法務大臣ヴァルガはそれに対処しなければならなかった。イスラエルのスパイウェア Pegasus 事件（政府に批判的な記者や学者の携帯電話に、スパイウェアを仕込み、盗聴した事件）も形式的な管轄は法務省だが、実際の運用はオルバン首相の承認のもとログーン決めている。この事件は法務省のスキャンダルとされたが、ヴァルガ大臣は事後処理に追われただけで、責任が曖昧にされたまま、問題が放置された。

また、法務省高官の汚職事件（裁判執行官事務所所長 Schadt György と法務省事務次官 Völner Pál との間で執行官任命にかかわって金銭がやり取りされた汚職事件）で、この二人は 2021 年 11 月に逮捕されたが、この事件が公になる前に、ヴァルガ大臣は事務次官 Völner を更迭しようとしたところ、オルバン首相がこれを阻止した経緯がある（この事件をめぐるのは、政権上層部周辺が関与した形跡があり、現在もなお、裁判と並行して検察の捜査が続いている。全容が参明されることはないだろう－筆者注）。

6. 首相の長女との結婚を契機に、一介の学生実業家からハンガリーのオリガルヒに成り上がったティボルツ・イシュトヴァン（オルバン首相の女婿）とは何度も食事をしたことがある。彼がこれまで積み上げてきた資産をみれば、ティボルツが最初に財を作り上げた ELIOS 事件（詳細は、拙著『体制転換の政治経済社会学』111-118 頁）など、金額的に見ればピーナッツに過ぎない。今、ブダペストを歩いてみれば、あれもこれも皆、ティボルツやその周辺の実業家や家

族の所有物だ。要するに、今首相一家に起きていることに比べれば、あらゆるものが大した問題ではない。Fidesz の友人は、「大きな過ちを犯した大人物がいる」とオルバン首相家族を評したが、自分もそう思う。このような状況が続いて良いわけがない。大きな変化が必要だが、国民の無関心が最大の問題だ。とりあえず、何はともあれ、ロガンは政府から去らなければならない。

マジヤール・ピーテルはロガンを称してフランスのリシュリューのような人物と評するが、その政治的役割はスターリンの権力を支えたベリヤに近い。今後、マジヤール・ピーテルのような内部告発が続くのか、それとも Fidesz の内部統制が強まり情報流出を阻止するか。いずれにしても、Fidesz 政権の実情は、共産党書記長と政治局が重要決定を担っていた共産党支配時代を想起させる。